

「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」報告

気仙沼における活動事例②

小出 晋之将（文学研究科比較文明学専攻）

福井 夏海（異文化コミュニケーション研究科修了生）

1. 活動概要

2017年3月18日（土）及び19日（日）に「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」の一環で「色のワークショップ」と「第二回気仙沼てつがく探検隊」が実施された。「気仙沼てつがく探検隊」は、気仙沼市教育委員会生涯学習課とともに始めたプロジェクトの第2回目となる。研究代表者として立教大学の河野哲也氏、研究協力者として奇二正彦氏、柳瀬寛夫氏が講師として参加し、立教大学、武蔵野大学から学生、院生、修了生がスタッフとして参加した。

このプロジェクトは、地域に住む子どもたちが大人たちと共に、①フィールドワーク、②図書館での調べもの学習、③子どもてつがく対話という三つの活動を通して新たな地域資源開発の基盤を生むことを目指すものである。数回のイベントという形ではなく、中・長期的な視点で、参加する小学生が高校生に、中高生が大学生や社会人になる期間で新たな関わり方を作っていく予定である。

（今号掲載の福井夏海「環境教育・地域づくりと連携した新しい図書館を目指して：気仙沼における活動事例①」を参照）

2. 活動報告

2.1 一日目：色のワークショップ「気仙沼の色ってどんないろ？」

3月18日（土）午後、気仙沼中央公民館にてこのワークショップは行われた。これは、新しい気仙沼中央図書館の内装を考える際に、「地元の人たちが考える気仙沼らしい色」を取り入れていきたいという思いのもと、図書館の設計者である柳瀬氏が考案したものである。

まず参加者には受付で2冊のカラー雑誌とA5サイズの台紙が配られる。次にハサミやカッターを使って雑誌から好きな色や模様や文字などを切り出し、台紙に思い思いのカラーージュを作成していく。最後にその作品を全員で見せ合って、作成した時の思いをふり返るという流れであった。

会場には図書館から司書が選んできたカラフルな絵本が飾られ、会場に彩りを添えるとともに、作品作りのインスピレーションとなるような工夫がされていた。作成の合間に柳瀬氏は、サンプル作品を提示したり、日本の伝統的な色に関する説明をしたりなど、参加者の参考になる情報を時折はさんでいった。約1時間半で、様々な個性の作品ができあがった。

気仙沼図書館で地域資源発見学習（フィールドワークと哲学カフェ）

気仙沼てつがく探検隊

参加費無料

■日時：平成29年3月19日（日）9:00～16:00

■場所：気仙沼市唐桑町（水山養殖場） 滋養会館敷地内：気仙沼中央公民館

■対象：ジュニア・リーダー（小・中学生）定員：15名程度（最少催行人数：10名）

★気仙沼を探検して、不思議を発見し、一緒に考えてみよう！

「気仙沼てつがく探検隊」は、学年を超えて集まったメンバーと一緒に、気仙沼を探検してつがくする探検隊です。地域の自然や文化、歴史、企業などについて調べ、よいことや問題、不思議を発見し、問い、話し、考えてみませんか？ 探検のことと知りたいたい、いろんな人と一緒に考えてみたい人の参加お待ちしています！

■スケジュール（予定）

9:00～10:00	集合・オリエンテーション・バス移動
10:00～12:00	フィールドワーク（水山養殖場・丸丸鳴き浜） ～カキ養殖の見学、海から丸丸鳴き浜に上陸します。～
12:30～13:30	昼食（各自お弁当持参）
13:30～15:30	哲学カフェ（みんなで問い、話し、考えます）
15:40～16:00	気仙沼図書館案内（図書館員が図書案内を行います）

* 昼食は、お弁当を持ってきてください。また、筆記用具、消し、鉛筆に
乗りますので動きやすい服装（防寒着・ズボン着用）をお願いします。
保護者の皆様には、必要に応じて「集合解散場所：気仙沼中央公民館」
までの送迎をお願いします。
（唐桑地区の参加者は、唐桑小学校前の駐車場から合流できます。）
天候や諸条件により、プログラム内容を変更する場合があります。

■ファシリテーター、スタッフ

- 河野 哲也（立教大学教授）
- 奇二 正彦
（株式会社社会設計研究所主任研究員）
- 福井 夏海
（立教大学異文化コミュニケーション研究科博士前期課程修了生）
ほか

■お問い合わせ・お申し込み

- 気仙沼市教育委員会生涯学習課生涯学習係【〒988-8502 気仙沼市唐桑町1-1（TEL22-3442）】
- 別添申込書を公民館ジュニア・リーダー担当まで提出願います。また、お電話でも受け付けいたします。

■主催：Rietax「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」（代表：立教大学・教授 河野哲也）

■共催：気仙沼市教育委員会、気仙沼図書館、岡田新一設計事務所

気仙沼てつがく探検隊第2回チラシ



ワークショップ会場の様子



できあがった作品の一部

立教大学・武蔵野大学のスタッフは、参加者の受付およびワークショップ全体の撮影と記録を行った。また、作業中は八つの机の間を行き来して、臨機応変にサポートを行った。

参加者は、小学生から大人まで幅広く、約 30 名（小学生 20 名、中学生 2 名、高校生 2 名、ゲスト 5 名と保護者数名）が集まった。児童の付き添いで来ていた保護者はもともと作品をつくる予定はなかったが、材料が余っていたので希望者に参加してもらい、ほとんどの保護者も作品を完成させた。そして結果的に、より多世代の作品がそろうことになった。

できあがった作品がホワイトボードにまとめられると、各自が気仙沼に抱く多様な色彩やイメージが集合体となり、一気に会場が華やかになった。全体的には落ち着いた青色や緑を基調としたものが多く、なかには鮮やかな桜色や祭りを思わせる黄色の作品もあった。できあがった作品は、図書館設計の参考にされる予定とのことである。

当日の柳瀬氏の提案で、ワークショップ最後の部分は河野氏が進行をすることになった。まずはできあがったすべての作品を全員が見渡せるように貼り、参加者はそれらを見てまわりながら自分の好きな作品を決められるよう時間をとった。その後、それぞれの人に「どのような気持ちでそれをつくったか」を簡単に話してもらい、かつ、その作品が気に入ったという人に、どこがよかったかを話してもらった。手がなかなか挙がらない時にはスタッフが手を挙げてコメントする役をつとめたこともあり、短時間ながらすべての作品の感想を聞くことができた。

2.2 二日目：「気仙沼てつがく探検隊」

二日目は、一日かけて行うワークショップ「第二回気仙沼てつがく探検隊」である。参加者は小学生 4 名、中高生 5 名の合計 9 名の子どもたちである。スタッフは気仙沼市職員の方 2 名を含め 10 名で、全員合わせると約 20 名の団体となった。

①唐桑町^{もうね}舞根でのフィールドワーク

朝 9 時に気仙沼中央公民館に集合の後、参加者の子どもたちとスタッフは全員で大型バスに乗って、気仙沼の北部の唐桑町にある水山養殖場へ移動、環境ガイドの畠山信氏の解説を伴う形で「てつがく探検隊」を開始した。畠山氏は、NPO 法人「森は海の恋人」の副理事長であり、牡蠣・ホタテ生産者、気仙沼市震災復興市民委員会委員も務めている。

当日は見事な晴天で、おだやかで美しい海が参加者を出迎えてくれた。講義や実験を行う建物に荷物を置き、幾つかの注意事項を確認した後、隣接した発着場から二つの漁船に分かれて乗船した。

あっという間に岸から2分ほどの位置にある養殖筏^{いかだ}へと接岸した。格子状に木材を組んで作られた養殖筏では、牡蠣の養殖を行なっている。畠山氏は牡蠣の生態や養殖のことについてただ解説を行うだけでなく、簡単な問題形式にして出題するなど、児童・生徒の関心を巧みに引いていた。また、洋上に浮く養殖筏は簡単な経験的実践を伴うものであり、一時的に牡蠣を引き上げた後、筏にかかる藻類や他の貝類も引き上げ、児童・生徒にそれらの感触を体験させていた。地域生活における食材としての側面も加えて話していたのが印象的であった。また、児童・生徒の何人かは養殖筏の上に乗し、その浮き沈みや波に影響を受ける感覚を楽しんでいた。



牡蠣の養殖筏に乗り移って解説をする畠山氏と児童・生徒

その後、再び漁船に乗り込んで、出発した場所の対岸に接岸し、砂浜の生き物を観察した。打ち上げられた牡蠣や貝類などの説明を畠山氏が始めると、子どもたちはそれぞれ興味のあるものやおもしろそうなものを探したり集めたりしだした。その後、畠山氏の提案で、反対側の海岸である九九鳴き浜に移動した。

九九鳴き浜は唐桑半島の風裏となっている。当日は養殖筏のある風表では少し風が強かったのだがその浜ではほぼ無風に近く、来た道よりさらにおだやかな海岸が広がっていた。子どもたちも浜の周辺を散策したり、興味があるものを拾ったり、水辺の生態系を観察していた。

砂浜に残るタヌキの足跡を確認するという場面もあった。足跡の爪の形からイヌの仲間かネコの仲間かが分かるという説明は、大人にも子どもにも分かりやすいうえに、実際には見えていない動物に対して想像力がわいてくる。



九九鳴き浜にて動物の足跡を観察する子どもたち

また、砂浜にはクルミが結構落ちていたのだが、この地域では海辺でクルミを拾う習慣が昔からあるという話もあった。地域の文化や習慣を含んだまるごとの自然環境を体感できる解説となっていて、スタッフも存分に楽しんで時間を過ごした。

その後、再び漁船に乗り込み、NPO 法人の施設に戻って、海や砂浜で採ってきた生き物を水槽に入れて観察を行った。また、顕微鏡で捉えた微生物の様子をスクリーンに大きく映し出し、畠山氏がホワイトボードに簡単な図を書いて食物連鎖や海産物の生態に関し

ても説明を行った。自分たちにも身近なカツオなどの大型魚が育つためには、どれだけの動物プランクトンが海にいることが必要なのか。動物プランクトンのえさになる植物プランクトンの量はどれくらいか。そしてその姿とはどんなものなのか。メモをとりなさいという指示は特に誰もしなかったが、子どもたちはそれぞれの判断で熱心にノートをとっていた。

②子どもてつがく対話

海辺でお昼を食べた後は、再び大型バスに乗って集合場所である中央公民館に戻り、てつがく対話を行った。ここではスタッフも子どもたち参加者も全員が対話に参加した。

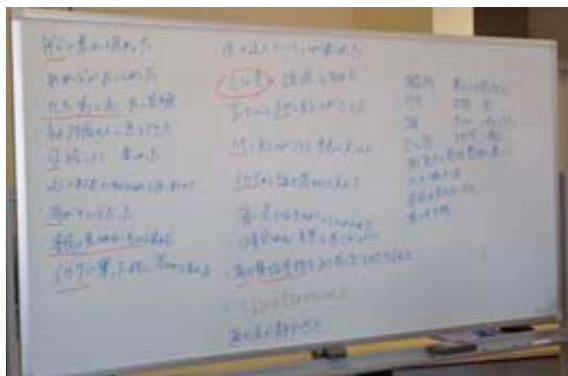


小学生グループの対話



中高生グループの対話

まずは全員で大きな円をつくり、コミュニティボールを回しながら本日の対話のテーマ決めを行った。参加者それぞれの感想をホワイトボードに書き出していくと、いくつかの問いが浮かび上がってくる。今日の体験に直結した海や船に関するもの、前日のワークショップを意識した色に関するもの、そして地域に関するものなど、話し合いたいテーマが色々と出てきた。最終的には「自然を感じるとはどのようなものか」というテーマに決まり、人数の都合上、二つのグループ（小学生グループと中高生グループ）に分けて、てつがく対話が始まった。この場でのファシリテーター（進行役およびホワイトボードへの記録）はスタッフの学生並びに院生が担当した。報告書作成者は参加者として、それぞれ別のグループに参加した為、以下で別個に報告と説明を行う。



テーマ決め

小学生グループについて（福井）

小学生の場合は、気持ちを伝えたい意欲はあるものの、言葉や表現がそれになかなかついてこないということがよくある。自分の考えを口にするのに一定の時間がかかる子も見受けられる。そこで進行役やまわりの人々が、丁寧に、かといってしつこくない程度に、質問や言い換えを行うサポートが必要なのだなと痛感した。

しかし、ほとんどの小学生はなかなか積極的に、発言する楽しさも味わっていたように見えた。最初はボールがまわってきた時だけおずおずと発言していた参加者も、後半はほとんど切れ目なく積極的に手を挙げるようになり次々に発言をしたため、全体的には活発な対話の場になったように思う。

中高生グループについて（小出）

中高生のグループでは、最初に、そもそも自然を感じるということの「自然とは何か」そして「感じるとはどのようなことか」という問いが出た。そこから、どのような場面に自然を見出すか、という話になり、最終的には自然と人工の境界線を探るような質問や問いかけで対話は終了した。中高生のグループは様子見をしている子もいないわけではなかったが、ファシリテーターやサポーターが一定の疑問を示すと、慣れてきたようでコミュニティボールを回しながら満遍なく自分の考えや質問による掘り下げを行っていたように見受けられる。概念や感じるという感覚を言語化することは中々困難な設定であったが、二項対立的な形に陥ることなく、コミュニティボールもよく回っていた。とはいえ、時折止まる場面もあり、ファシリテーターやサポーターによる介入においても、彼らの考えを掘り下げきれなかった場面も幾つか見られたことは触れておく。

③気仙沼図書館での調査活動

最後に全体でのまとめを行った後に、中央公民館から気仙沼の仮設図書館に向かい、今回のフィールドワークと子どもてつがく対話を掘り下げる文献を探す下りとなった。しばらくの調査活動の後に中央公民館に戻り、本日の感想を書いてもらった後に解散となった。



仮設の気仙沼図書館



児童・生徒の調査活動

3. 考察

以下、それぞれの考えたこと、考察したことにに関して述べる。

3.1 考察と感想（福井）

一日目のワークショップは、親子で参加できるうえに地元の図書館づくりにも関わられるという、公共図書館らしい魅力的な企画だったと思う。ここでつくられた作品が新しい図書館のなかでどんなふうにかされていくのか楽しみである。そして、参加者の方々が自分たちの作品が図書館の一部となっているのを見た時に、「自分たちも新しい図書館をつくる時に参加したんだ」と感じられるような形になってほしいと願っている。また、このワークショップは、アート、環境、図書館といったコンセプトがつながっているのも素晴らしく、子どもてつがく探検隊が目指していることをまた別の形で生み出すものとなっていると感じた。多世代が参加できる企画、自分たちの地域を考える企画として、新図書館ができた際にも同様のワークショップを開けるとよいのではないだろうか。

二日目に関しては、まずは何より畠山氏のガイドで唐桑の海を初めて体験し、場所とガイ

ドのおもしろさになってしまった。ぜひ別の季節にもあらためて訪問したいと思う。

子どもてつがく対話については著者自身経験が浅いということもあり、終わった後にかなり反省点が残った。特に、言語の発達や表現力の向上を意識した言語教育活動と、その場にあるものから即興で意味を深めていくこの対話は、少し性質の違うものであることを意識する必要があると思った。対話に参加した児童・生徒にとって、参加したことで何かを得るということを意識するよりも、安心して参加でき発言できることを目指すのがよいのかもしれない。今回は2名の参加者の発言に関して大人のフォローが行き届かなかった（言い換えや追加の質問などがほとんどできなかった）と感じていたが、満足度はその印象とまた違うこともわかった。

今回は、最後のふりかえりのアンケートを書く時間が少なかったことも反省である。時間が短いと無難に短い文章にまとめてしまうということも多い。

アンケートの回答を見ると、自由な発言ができるという書き方が目立ったのは意外だった。何が「自由」と感じられたのかを次回以降も継続的にみていきたいと思うが、おそらく正解や期待される発言を考えずに発言してほしいという趣旨はある程度伝わったということだろう。次の回でも子どもたちの様子や発言を見ながら、その意味を考えていきたい。

3.2 考察（小出）

私見ではあるが「てつがく探検隊」における司書の連携の可能性と全体的な所感に関して述べる。著者は気仙沼での参加は初めてとなるが、二日目の最後に行った図書館での情報探索活動に関しては、図書館で調べ物を行う、という慣習化を除いて意味は希薄であった、ということは前提として述べておかななくてはならない。これは、純粋に仮設図書館における絶対的な資料数の不足によるものであり、正式な図書館が建築された後には解消できる点でもある。（もっとも、今回の様に概念的且つ即時的な命題設定であった場合その解消には一定の困難があるのだが。）仮設図書館の幾つかの特徴として、山田町のふれあいメディアセンター内の図書館もそうであるように、児童書、5類、9類、主婦が用いる雑誌、災害関係の書籍などが中心に配架されることとなり、その他の類は極端に少ない。気仙沼の仮設図書館の蔵書の多くは、蔵書管理システムに登録こそされているが、近隣の学校の体育館に段ボールで閉架の扱いで収蔵されており、そこから出庫されることはまずないと司書も話していた。リクエストや読みたいものがある場合は、中央図書館から取り寄せる形となっている。そうした状況下において、図書館での情報探索活動を現時点で有効的に機能させることは中々困難な点であるだろう。

では、どの様な展望が考えられるのか、新設される新しい図書館の施設としての利用の道はワークショップの場としても、情報探索の場としても有効に機能し得るだろうが、多世代的な哲学カフェと子どもてつがく対話の連携、地域資源の好循環の形成という観点から考えるなら、司書との一定の連携が必要となるだろうか。

こうした文献調査に際しては「対話のテーマを深めるため」のもの、もしくは「フィールドワーク」「ワークショップ」を深めるもの、「目的を達成可能」なもの、いずれかの選書基準、調査基準が必要となってくる。そうした際に、何処の棚に行けばそのテーマに関して調べられるのか、どの様な本ならそのテーマに関して深められるのか、など一定の専門的な準備が必要となってくるのである。対話に関して習熟やファシリテーターが必要とされるのと同様に、図書館での活動に関しても習熟やファシリテーター、司書が必要とされる。対話においてはそれを深めるための図書の準備というものは即時性が強く、概念的なものが多い可能性もあるので、難しいかもしれないが、それが具体的なテーマや問題意識に着地すること

が想定される場合には一定の準備、司書への協力の要請が必要とされるところと考えている。また、その際には、図書館の資料活用の指導も併せて行うのか、ということも視野に入れなくてはならないだろう。

そして、今回の活動全体に関しては、一日目と二日目に関して繋がりはないが、二日目のフィールドワーク、てつがく対話、図書館でのプロジェクト学習に関しては、最後の図書館を除いて一定の連携が見られた。児童・生徒たちのフィールドワークでの体験を現場で知識として確認、定着し、それを念頭に置きつつもプラトンの対話により概念や感覚の掘り下げを行った。河野氏は最終的に地域にこれらの循環の形式が定着し、自主的に循環を行えるようにしていきたいと語っていた。これらの循環が有機的に連携していく為の統合性に関しては著者の理解の及ぶところではない。しかし、気仙沼という場、施設を理解し活用するという観点では実に有効であり、児童・生徒たちがこうした連携、循環の様式に馴れていくことは河野氏が語る地域資源をめぐる活動の定着を考えた場合に、意味があることだろう。

※本研究は科学技術振興機構 Ristex 「多世代哲学対話とプロジェクト学習による地方創生教育」の支援を受けたものである。